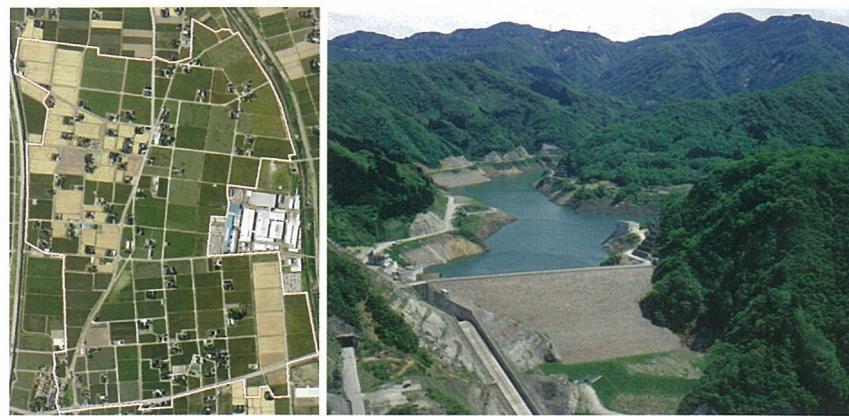


小矢部川上流用水

刀利・白中の慈しみをつなぐ



ほ場整備後の北山田北部地区(写真左)/白中ダム(写真右)

白中ダムの建設
ほ場整備事業による
ほ場の大区画化と大型機械導入による営農形態の変化によつて、用水不足が問題化した。そこで計画されたのが、白中ダムの建設などを柱とする「打尾川地区かんがい排水事業・防災ダム事業」である。この事業で、西部山四ヶ村の大鋸屋立野原、四ヶ村の4用水路が整備された。(第6話)



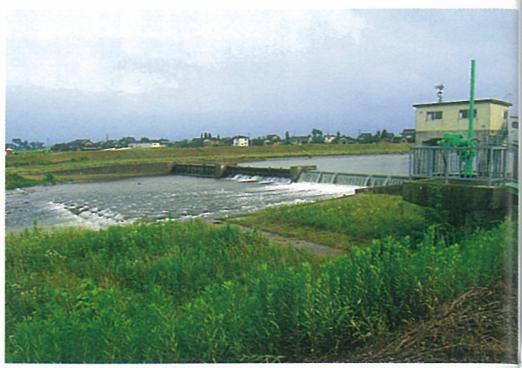
山田新田用水発電所
(仮称)
近年、注目を浴びているのが農業用水を利用した「小水力発電」である。平成23年10月5日に起工式が行われた「山田新田用水発電所(仮称)」は、平成25年3月の運転開始を目指して建設が進められている。(第7話)



松村謙三胸像

井口仁志胸像

農業振興に尽力した先人
井口仁志(1875~1963)は、小矢部川上流域の土地改良事業の先鞭をつけた耕地整理と、桜ヶ池造成に尽力した。(写真右)(第8話)
松村謙三(1883~1971)は、農地改革と刀利ダム建設に尽力した清廉な政治家として知られ、晩年は日中友好・日中国交回復にも力を尽くした。(写真左)(第8話)



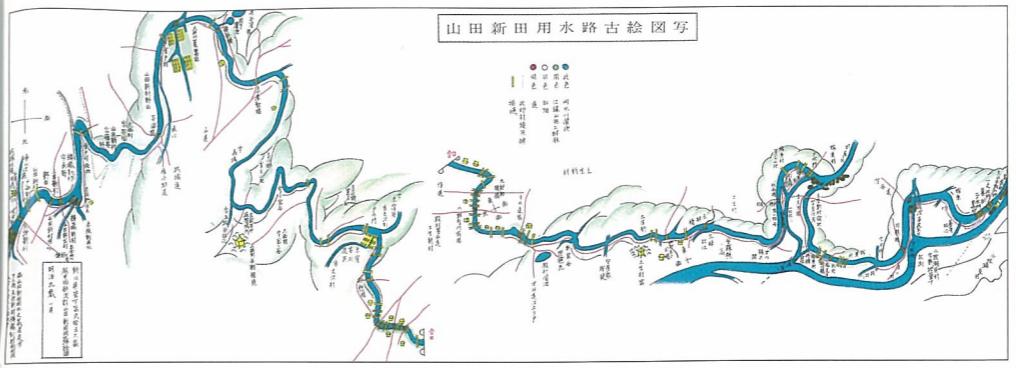
第三頭首工(写真上)/旧山田新田用水取入口(写真下)

刀利ダムと用水路
刀利ダムによって確保された水量を合理的に配分するため、「小矢部川上流用水改良事業」により建設されたのが、第三頭首工と、立野ヶ原、吉江、東石黒、中砥中の6用水路である。(第4話)



立野ヶ原農用地開発事業記念碑

立野ヶ原
立野ヶ原は、旧福光町・旧城端町の南部に開けた広大な台地で、戦前まで陸軍の演習場として使用されてきた。戦後になつて開拓団が入植し、開墾が進められたが用水不足のため営農は困難を極めた。そこで計画されたのが総工費40億円を超える「立野ヶ原農用地開発事業」であった。(第5話)



寛文年間に造成された山田新田用水路古絵図写

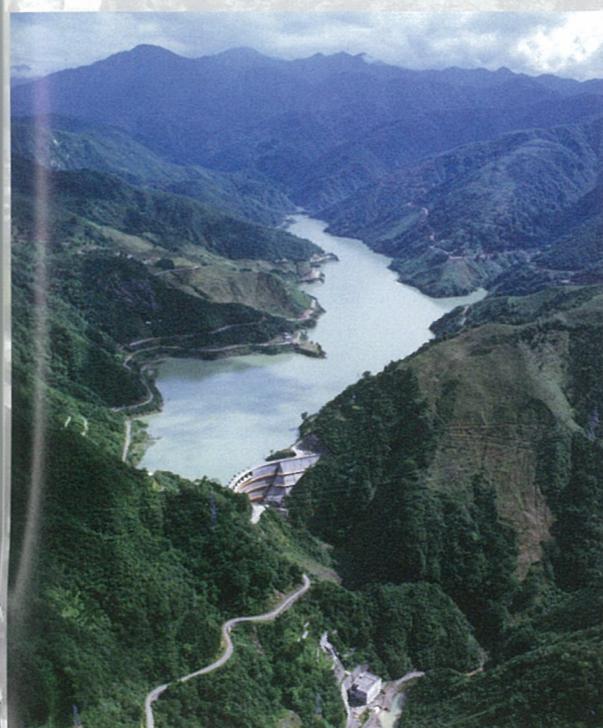
初代・山田新田用水
初代・山田新田用水が造成されたのは、政時代の寛文年間である。加賀藩5代藩主前田綱紀が、鷹狩りで山田野を訪れた際に新田開発を思い立つたと伝えられている。この用水の造成を機に、活発に開発が進められ、多くの村が成立した。(第2話)



公募で名が付いた桜ヶ池
水不足に悩まされてきた小矢部川上流域の谷あいでは、雨水や融雪水を蓄えるため池をつくり、かんがいに利用していた。恒常的な水不足解消のため立野ヶ原演習場内に計画・造成されたのが「西原溜池」である。「桜ヶ池」の名は公募で付けられたもので、平成22年に「ため池百選」に選定された。(第3話)



小矢部川
急流河川の多い富山県では珍しい緩流河川である小矢部川。しかし、その源流は地勢が急峻で、水を蓄える森林が少なく、河川流量の変動の激しい地域である。上流域では、古くはため池や小矢部川との支流からかんがいし、多くの取水口が存在していた。(第1話)



ノゾキにできたダム
昭和34年に決定した「国営小矢部川農業水利事業計画」で建設された刀利ダム。ダム建設場所は、通称「ノゾキ」と呼ばれる場所で、強固な岩盤でできた瓢箪状の地形であった。刀利ダムの建設により、農業用水が安定的に確保された。(第4話)

発刊の言葉

小矢部川上流用水土地改良区 理事長 幅田 隆

小矢部川上流域の農業は古来、小矢部川とその支川をかんがい水源としていました。大きな用水として、寛文12年（1672）の末、加賀藩5代藩主前田綱紀公が約10年の歳月をかけ開削した山田新田用水がありますが、ほとんどの用水は1～2集落が共同で小矢部川に木工沈床や蛇籠・土俵などを並べて取水し、水田を耕作していました。

しかししながら、夏季の渴水がはなはだしく、その上、河床が不安定なことから、連年、用水不足により小矢部川の水をめぐる紛争を繰り返して、取水施設管理の問題と旱害はきわめて深刻がありました。

このことから夏季渴水の補給と取水施設の経費節減が課題であつたため、小矢部川筋用水と山田新田用水普通水利組合が共同して、小矢部川上流に貯水池を設置することが大正15年ごろから検討され、昭和5年4月に小矢部川支川、蛇谷川（堤立方メートル）が着工しましたが、地質が悪く、堤高19.5メートル、貯水量36万立方メートルで工事の中止のやむなきに至りました。以来、太平洋戦争等により抜本的な改善は望めず、累年の旱害と水害に悩まされてきました。

昭和26年12月、飛越特定地域の指定を機に、昭和28年5月に南砺総合開発計画が立案されました。この南砺総合開発計画の一環として、農林省は、農業用水補給と農地防災を目的とした刀利ダムの築造と、小矢部川上流域の29カ所に及ぶ取水施設を9カ所に統廃合して用水幹線の整備を行う事業を、昭和33年1月に決定し、国営小矢部川農業水利事業、県営発電事業、国営付帯県営小矢部川上流地区事業により、小矢部川上流地域の1市3町に及ぶ3780ヘクタールの農業用排

水基盤の抜本的な改善を行い、農業経営の安定向上を図ることを目的として着手されたのであります。

刀利ダムの完成（昭和42年）と用水路の整備が進む中、地域内では営農の合理化・省力化等を目的として、ほ場整備が急速に進められました。その結果、代播きの集中など、営農形態の変化によってかんがい用水の利用パターンが変化し使用水量が増大し、昭和43年以降、しばしば用水不足が生ずることとなりました。そこで、昭和50年度に小矢部川水系上流部の恒常的な水不足区域434ヘクタールを含めた4353.6ヘクタールを対象としたかんがい排水及び小矢部川支川の打尾川の洪水に対する1144ヘクタールの農地防災を目的とした防災ダム（白中ダム）事業が県営事業として採択されました。

刀利ダム、白中ダム完成後、現在まで洪水による溢水被害もなくなり、平成6年には、生涯あるかないかの猛暑干天となりましたが、ダムのおかげで豊作の喜びを得ることができます。このように、両ダムは気象観測史上最大の渴水や台風による洪水被害に対しても大きな威力を發揮し、今日その役割に搖るぎない信頼を得てていることはご存知のとおりです。

今、国、県、市町村など関係機関のご支援と、多くの人々の努力の結晶としてできあがった土地改良施設を、これからも良い状態で維持し、末永く、その目的を果してくれることを願ってやみません。

終わりに、発刊にあたり編集に格別のご協力を賜りました荒井武光氏はじめ、県、砺波農林振興センターほか、編集委員各位に対し深甚の敬意を表し、発刊の言葉といたします。

平成二十四年三月



旧福光町市街地を流れる小矢部川

刀利・臼中の慈しみをつなぐ 小矢部川上流用水 目次

発刊の言葉 4

第1話 小矢部川流域の概要 6	第5話 農業の近代化とほ場整備 18
緩流河川・小矢部川	農地改革と土地改良
小矢部川と庄川	立野ヶ原と農用地開発事業
小矢部川上流域の概要	ほ場整備事業の拡大
第2話 小矢部川上流域の農業と農政 8	臼中ダムと用水路の整備 20
小矢部川上流域の農業の起り	當農形態の変化への対応
加賀藩の農業政策	臼中ダムの建設
山田新田用水の開削と山田野の新田開発	平成のほ場整備事業
第3話 明治から戦前の用水補給 10	第6話 地域の暮らしを支える農業用水 22
小矢部川上流域の用水補給	農業用水の多面的機能
耕地整理の先進地	暮らしさに密着した諸活動
山田川流域の用水補給	水辺環境保全への取り組み
桜ヶ池の造成	「コラム」小矢部川上流域の行事
「コラム」瞞着川と河童伝説	第7話 西部山麓用水路 大鋸屋用水路
「コラム」ため池百選と桜ヶ池	松山 善昭 荒井 武光 元福光町助役
刀利ダムの建設	居島 秀夫 堀 和男 小矢部川上流用水土地改良区事務局長
用水路の整備	長谷川正昭 福光町土地改良区事務局長
立野原用水路	中仙道一秋 城端土地改良区事務局長
山田新田用水路	山本 健次 富山県土地改良事業団体連合会事務局長
上江石黒用水路	島田 俊弘 指導部長
砺中用水路	森谷 義春 富山県農林水産部農村整備課長
「コラム」ダムに消えた村	吉田 健一 富山県砺波農林振興センター所長
	小矢部川ダム管理事務所長
第4話 刀利ダム建設と用水整備 14	先人たちの事績 24
繰り返される氾濫による被害	耕地整理と桜ヶ池造成に尽力した 井口仁志
富山県総合開発計画	農地改革と刀利ダム建設に尽力した 松村謙三
刀利ダムの建設	
用水路の整備	
立野原用水路	
山田新田用水路	
吉江東石黒用水路	
上江石黒用水路	
砺中用水路	
「コラム」ダムに消えた村	
	小矢部川上流用水年表 26
	主要参考文献 27

小矢部川流域の概要

緩流河川・小矢部川

小矢部川は、富山県の南西端に位置し、流域では緑豊かな田園風景が広がる散居村が形成されている。富山県南砺市の南部と石川県との県境にある大門山（標高1572メートル）に源を発して渓谷を流れ下る。南砺市において、（うちお）弓羽川、山田川と合流して、

小矢部市において、渋江川、子撫川、さらに高岡市において祖父川、千保川などを合わせて、日本海に注いでいる。

県内であるが、上流域の刀利ダム付近でわずかに石川県の流域を有している。硬い岩石で構成された上流部の山地は急峻な地形で、長瀬峡や刀利ダ

ムの下流で深い峡谷を形成している。一方、刀利ダムから小矢部大堰まで
の区間と大堰から河口までの区間は、
河床勾配がそれぞれ400分の1～
800分の1、800分の1から水平
に区分される。全流路の70%程度は平
野部を貫流しており、急流河川が多い
富山県内の河川では珍しい緩流河川で
ある。

小矢部川の支流は極めて数が多く、
大小合わせて64本にもなる。また、庄
川扇状地の扇端部を流れているため、

(1900)より、庄川改修工事（第2期）が行われ、庄川の流路が変えられた。分離工事は大正元年に竣工、これにより小矢部川は単独水系となり、庄川の逆流による被災はなくなつた。だが、河床勾配が緩く、庄川から運ばれてきた砂礫によつて砺波平野の庄川扇状地が大きく発達したため、小矢部川の流路は西側へ押しやられて、下流でくねくねと蛇行しているため、庄川との分離後も豪雨のたびに氾濫し、流域に被害を与えていた。

小笠郡川上沢城の概要

1000メートル級の山々がある小矢部川上流部の地形は急峻であり、平坦地はほとんどない。また刀利ダムより上流の高地部は、ブナやナラなどの原生林で構成されて



小矢部川上流域（南砺市太美山地内）

おり、長瀬付近では山間地特有の風光明媚な景観を有している。富山・石川県境の医王山県立自然公園、支流大井川上流の桜ヶ池付近の桜ヶ池県定公園、支流旅川上流の八乙女山・閑乗寺県定公園などがあり、豊かな自然に恵まれている。

小矢部川上流域には農地が広がっており、水稻単作の農業が主流である。小矢部大堰から河口までの流域の右岸は主として庄川からのかんがい用水に依存しているが、上流域は小矢部川とその支流からかんがいしている。

小矢部川水系の農業用水路は、他の河川とは異なり、少ない水を有効活用するために古くから開発が進んだ。河床の高い庄川からは比較的容易に取水できたが、河床が低い小矢部川では、取水の好適地(注)いちんさちを選んで堰をつくり、取水口の横に沈砂池を設け、それから等幅、等勾配に導水する多くの農業用水の取水口が分布していた。

小矢部川上流域の気候は、富山県のなかでは比較的穏やかであるが、雨量は多く、雪のために年間降水量は冬が最も多い。梅雨や台風の時期にもよく雨が降り、多雨多雪地帯となっている。さらに上流部は地勢が極めて急峻である上に、水を蓄える森林が少なく、林相も悪いため、河川流量の変動が大きかった。洪水時には甚大な被害を受けた一方、降雨の少ない年は、たびたび干ばつの被害を受けた。

相も悪いため、河川流量の変動が大きかつた。洪水時には甚大な被害を受け一方、降雨の少ない年は、たびたび干ばつの被害を受けた。

おり、長瀬付近では山間地特有の風光
明媚な景観を有している。富山・石川
県境の医王山^{いおうざん}県立自然公園、支流大井
川上流の桜ヶ池付近の桜ヶ池^{さくがいけ}県定公
園、支流旅川上流の八乙女山^{やおじょ}・閑乘^{かんじょう}
寺^じ県定公園などがあり、豊かな自然に
恵まれている。

This map illustrates the locations of various water intake facilities along the Nakagawa River upstream as of around 1966. The river flows from west to east, with tributaries joining from the north and south. Key features include:

- Intake Facilities:** Numbered 1 through 29, indicating the sequence of intakes along the river. Facility 1 is at the mouth of the Nakagawa River, and facility 29 is near the headwaters.
- Water Bodies:** The Nakagawa River itself, several tributaries (浦谷川, 吉谷川, 明神川, 大谷川, 糸谷川, 太谷川, 蛇谷川), and two reservoirs (桜ヶ池, 是ヶ谷ため池).
- Hydroelectric Dams:** 刀利ダム (Torigi Dam) at the mouth of the Nakagawa River and 白中ダム (Shirakami Dam) further upstream.
- Headworks:** 第一頭首工 (Headwork 1) on the Nakagawa River, 第二頭首工 (Headwork 2) on the Daitoku River, and 第三頭首工 (Headwork 3) on the Nakagawa River.
- Legend:**
 - 左岸側取水口 (Left bank intake)
 - 右岸側取水口 (Right bank intake)
 - 小矢部川 (Koyabe River)

番号	取水施設名称
1	嫁兼用水取水口
2	嫁兼用水取水口
3	山田新田用水頭首工
4	小坂用水頭首工
5	奉行野用水頭首工
6	土生新用水頭首工
7	土生用水頭首工
8	竹林用水頭首工
9	上江用水頭首工
10	寺田用水頭首工
11	高大用水頭首工
12	浦川原用水頭首工
13	桜木用水頭首工
14	下江頭首工
15	畑田用水頭首工
16	三ヶ村用水頭首工
17	吉上用水取水口
18	中用水取水工
19	森用水取水口
20	遊部川原用水頭首工
21	三の川用水頭首工
22	大用頭首工
23	中用水取水口
24	下用頭首工
25	三ヶ村用水頭首工
26	川原江用水取水口
27	前川用水取入口
28	中島用水取入口
29	四ヶ村用水取水口

小矢部川上流域の取水施設（昭和41年ごろ）

業水利事業が着手され、洪水調節と発電を含む多目的の刀利ダムが昭和42年に完成、併せて小矢部川第一・第二・第三頭首工を新設し、農業用水の整備が図られた。

河川となつて、富山湾に流れ込んでいた。現在のように、河口が庄川と分けられたのは、大正元年（1912）のことである。2大河川が合流するため、河口ではたびたび洪水に襲われ、深刻な被害が生じていた。また、庄川の洪水による逆流で小矢部川は破堤を繰り返していた。庄川からの逆流による災害の防止を目的として、明治33年

小矢部川流域図（『富山県土地改良史』より作図）

小矢部川と庄川

小矢部川は、かつては庄川やその支流である千保川と合流し、射水川と呼ばれていた。射水川の名は大伴家持の歌にも詠まれている。

江戸時代初頭から明治時代までは、小矢部川が河口部の高岡市伏木付近で、庄川の左支流として合流し、一本の大

河川を通じて、小矢部川に排水される。河川流路延長68キロメートル、流域面積は667平方キロメートルで、庄川扇状地の大部分を流域としている。

流れが緩やかなため、舟運に適しており、古代から越中の大動脈として、上流の砺波平野の米をはじめ、多くの物産が小矢部川を使って伏木港へ運ばれていた。石動がその交通の結節点となつており、河川名は小矢部村（現・小矢部市石動）の地名か

小矢部川と庄川

江戸時代初頭から明治時代までは、小矢部川が河口部の高岡市伏木付近で庄川の左支流として合流し、一本の大流である千保川と合流し、射水川と呼ばれていた。射水川の名は大伴家持の歌にも詠まれている。

河川を通じて、小矢部川に排水される。河川流路延長68キロメートル、流域面積は667平方キロメートルで、庄川扇状地の大部分を流域としている。

流れが緩やかなため、舟運に適しており、古代から越中の大動脈として、上流の砺波平野の米をはじめ、多くの物産が小矢部川を使って伏木港へ運ばれていた。石動がその交通の結節点となつており、河川名は小矢部村（現・小矢部市石動）の地名か

小矢部川と庄川

小矢部川は、かつては庄川やその支流である千保川と合流し、射水川（おとせがわ）と呼ばれていた。射水川の名は大伴家持の歌にも詠まれている。

江戸時代初頭から明治時代までは、小矢部川が河口部の高岡市伏木付近で庄川の左支流として合流し、一本の大

おり、長瀬付近では山間地特有の風光明媚な景観を有している。富山・石川県境の医王山県立自然公園、支流大井川上流の桜ヶ池付近の桜ヶ池県定公園、支流旅川上流の八乙女山・閑乗

寺県定公園などがあり、豊かな自然に恵まれている。

小矢部川上流域には農地が広がっており、水稻単作の農業が主流である。小矢部大堰から河口までの流域の右岸は主として庄川からのかんがい用水に依存しているが、上流域は小矢部川との支流からかんがいしている。

小矢部川水系の農業用水路は、他の

河川とは異なり、少ない水を有効活用するため古くから開発が進んだ。河床の高い庄川からは比較的容易に取水できたが、河床が低い小矢部川では、取水の好適地を選んで堰をつくり、取水口の横に沈砂池(せんじょうち)を設け、それから等幅、等勾配に導水する多くの農業用水の取水口が分布していた。

小矢部川上流域の気候は、富山県のなかでは比較的穏やかであるが、雨量は多く、雪のために年間降水量は冬が最も多い。梅雨や台風の時期にもよく雨が降り、多雨多雪地帯となっている。さらに上流部は地勢が極めて急峻である上に、水を蓄える森林が少なく、林相も悪いため、河川流量の変動が大きかった。洪水時には甚大な被害を受け一方、降雨の少ない年は、たびたび干ばつの被害を受ける。

小矢部川上流域の農業と農政

小矢部川上流域の農業の起り

考古学に見る遺跡や遺物から、小矢部川上流域では、西部の山麓地域が最も早く開けたところであると推測されている。次いで、小矢部川・打尾川、明神川などの流域が開発された。これらの地域には、旧福光町・旧城端町にまたがる「立野ヶ原遺跡群」や医王山山麓の「才川七的場遺跡」など、旧石器時代の遺跡（約3万年前）

（1万3千年前）や縄文時代初め頃の遺跡が集中している。早くから人が住み、一定の生活領域内を移動しながら狩猟採集生活をしていた。

弥生期に入つて大陸から農耕文化が伝来し、食糧は採集から生産へと転換され、水田の開拓が始まった。さらに奈良時代には、国家収入を増やすために、大規模な開墾計画が策定された。天平15年（743）、墾田永年私財法が発布され、墾田の永年私有を認め、新田開発を奨励した。

現在の砺波市・南砺市における水田開拓の歴史は古く、8世紀半ばから10世紀にかけては、土着の有力豪族である利波臣の一族が砺波郡司職を独占し、盛んに土地を開拓していた。『続日本紀』に、天平19年（747）、利



前田利常像（那谷寺蔵）

とし、平安時代から鎌倉時代初期にかけては、大開墾時代と呼ばれるほど多くの莊園が成立した。福光一帯に円宗寺領石黒莊があつたほか、朝廷御領（内藏寮）の蟹谷莊、加賀国境に近い砺波郡西部丘陵地帯にも国衙領の莊園があつたことが記録に残されている。

石黒莊は、山田郷、弘（広）瀬郷、吉江郷、太美郷などからなる大きな莊園で、小矢部川と山田川との合流付近から南側の平野のほとんど全域に及んでいる。このうち史料に恵まれ、莊園の実相が分かっているのは、弘（広）瀬郷である。稻作を中心として、大豆・小豆・麻・桑などの畑作も行われていた。また、北山田地区で発見された梅原胡摩堂遺跡群は、山田郷の莊園村落にかかるものと思われ、山田郷が弘（広）

規模で開墾した土地を私有化して莊園とし、平安時代から鎌倉時代初期にかけては、大開墾時代と呼ばれるほど多くの莊園が成立した。福光一帯に円宗寺領石黒莊があつたほか、朝廷御領（内藏寮）の蟹谷莊、加賀国境に近い砺波郡西部丘陵地帯にも国衙領の莊園があつたことが記録に残されている。

石黒莊は、山田郷、弘（広）瀬郷、吉江郷、太美郷などからなる大きな莊園で、小矢部川と山田川との合流付近から南側の平野のほとんど全域に及んでいる。このうち史料に恵まれ、莊園の実相が分かっているのは、弘（広）瀬郷である。稻作を中心として、大豆・小豆・麻・桑などの畑作も行われていた。また、北山田地区で発見された梅原胡摩堂遺跡群は、山田郷の莊園村落にかかるものと思われ、山田郷が弘（広）

瀬郷よりも早くから開発されて、領家の支配が行き届いていたことが窺える。その後戦国時代末までに、数多くの村々が形成されて農業が営まれた。その中心は水稻栽培のため、かんがい用水が不可欠であり、それぞれの村ごとに用水を引き、水田の開発が進められた。しかし、洪水による河川の氾濫や水不足により、新田開発は遅々として進まなかつた。

加賀藩の農業政策

天正13年（1585）より、小矢部川流域一帯は加賀藩の領有となつた。100万石を有する強大な外様大名である普請や軍役を命ぜられ、あるいは家格を維持するための交際費などにより、支出はかさんでいった。加賀藩は、藩財政の基礎を農業に求め、再検地や新田開発を奨励し、耕地の拡大によつて年貢高の增收、ひいては藩財政の安定化を図った。

中でも、加賀藩3代藩主前田利常は、積極的な農業政策を進め、慶安4年（1651）から明暦2年（1656）にかけて改作法と呼ばれる農政改革を実施した。改作法の施行を徹底させるため、農政に専念する改作奉行を設

(注1) 普請 繕城やかんがい用水路・溜池、港湾や防波堤などの、公共工事のこと。役務・役職としても用いられた。

(注2) 改作法 慶安4年（1651）～明暦2年（1656）、加賀藩5代藩主前田綱紀の後見をしていた前田利常（3代藩主）が実施した農政の基本方針。土地・租税制度の整備や、十村を中心とする農村支配を確立することで、農民の暮らしを安定させ、税収の安定化が図られた。

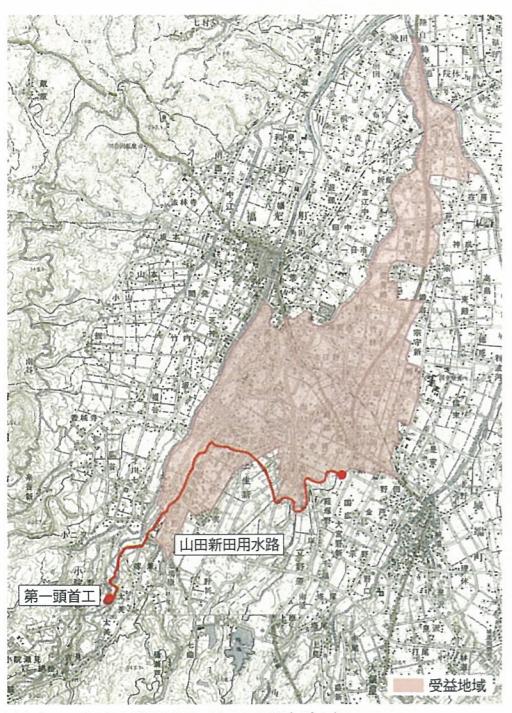
(注3) 改作奉行 加賀藩独自の奉行で、勧農および年貢の収納を担当した。

(注4) 十村 10カ村程度ないし数十カ村を管轄して農政全般に関する業務を担当した村役人。

(注5) 肝煎 村役人の長で、加賀藩の村支配の末端に位置する。

(注6) 藩主 大名のこと。

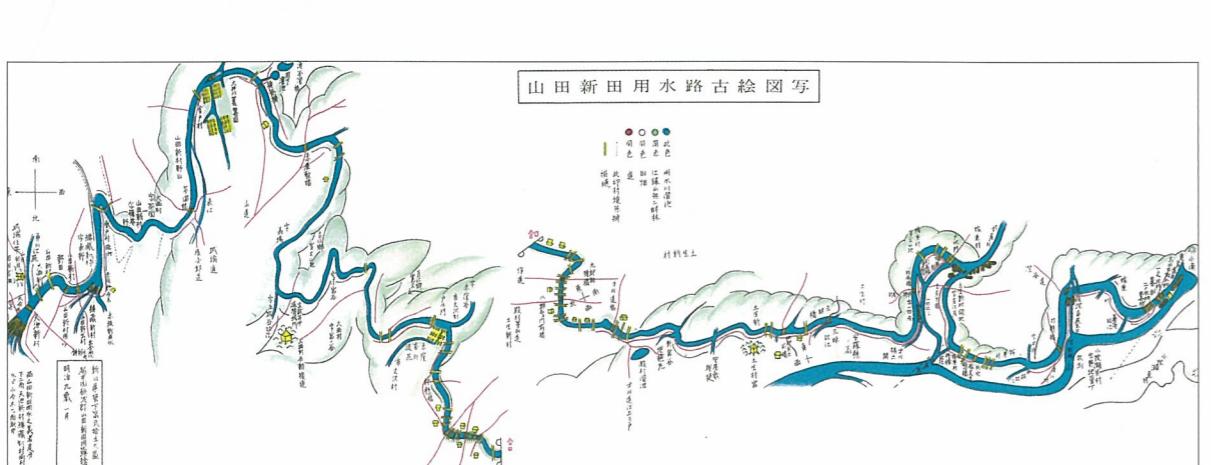
(注7) 新田裁許 加賀藩の農政担当役人で、5代藩主綱紀によって設けられた役職。改作奉行より任命され、十村の下役として新開奨励、工事の監督などを任務とした。



現在の山田新田用水路の受益地域

用水幹線水路の荒掘りが完成したことを見た。そこで、用水路の改作奉行に報告している。取り入れ口は、小矢部川右岸西太美地区野地の小矢部川原、分水岐点は旧城端町細木の神明宮の裏である。なお、神明宮は用水の守護神として建立され、神体は藩侯より奉納されたと伝えられている。順次新田開発が進められ、延宝6年（1678）までに2400石を超える水田が開かれ、多くの村が成立した。藩政時代を通して、山田新田用水の維持管理は、加賀藩の手厚い保護の下に置かれた。用水路の修理は藩費によりてまかなわれ、管押運管は新田裁許または十村の責任において行われた。

山田新田用水は、昭和47年に国・県



「山田新田用水路古絵図写」（『山田新田用水史』より）

明治から戦前の用水補給

小矢部川上流域の用水補給

近代国家の成立とともに農業水利や土地改良事業にかかる法制度の制定・整備と併せて、農業生産力の発展と食糧増産を目的として政府の支援が行われるようになった。大正の終わり頃から多額の資金が投入されるようになつたが、明治時代にはまだ農業政策と言えるようなものもなかつた。

藩政時代の用水の維持管理・修補を行つたのは農民による組織であつたが、明治時代になつても、実際に用水の維持管理にあたるのは、やはり地域の農民であり、水不足に悩み、水争いを繰り返しながら多大の労力と費用をかけて用水を管理した。

明治23年（1890）に制定された水利組合条例とこれを全面改正した水利組合法（明治41年改正）により、用水組織は、普通水利組合として実質的に引き継がれることになった。小矢部川はもともと水を集める流域も小さく水を蓄える森林が少ないため、上流部では水が不足し、たびたび干ばつが起つた。さらに水源地域の山林の変化によって、年々減水の傾向にあり、河床も不安定であった。小矢部川上流域には取水施設も数多くあつた。

が制定され、同42年には全面的に改正がなされ基本的な法制ができあがつた。耕地整理法が制定されたことにより、旧福光町では明治33年に耕地整理に着手する予定であつたが、地区農民の理解と協力が得られず、時期尚早とされて実施されなかつた。

しかし、大正12年（1923）、松村謙三が組合長となつて「福光町耕地整理組合」を結成、同年3月県知事の認可を得た。すぐさま第1期試験工事に着手し、同年6月に完工した。この結果、農作業の省力化と生産性が増したことから、耕地整理事業は継続され、大正14年、全地区125町5反歩余りの工事を完了し、併せて道路・水路の改修も行われた。この事業の完了により、は場は400歩（約13.3アール）に区画整理され、農作業の軽減はもとより、交通の利便性向上など、恩恵は大きかつた。



旧北山田村梅原小杉区画整理確定図
（『梅原小杉耕地整理事業誌』より）

山田川流域の用水補給

大正末から昭和初期、富山県はたびたび干ばつに見舞われている。農業用水の流量が季節的に大きく変動する地域や、河川からの取水が地形上困難な地域では、水不足に悩まされ、干ばつのたびに水争いが起つた。

旧南山田村、旧北山田村を中心とする山田川左岸では、小矢部川支流の山田川の水をかんがいに利用しており、は場は400歩（約13.3アール）に区画整理され、農作業の軽減はもとより、交通の利便性向上など、恩恵は大きかつた。



地下揚水のためのポンプ小屋

たが、用水不足による紛争と取水施設の維持管理は深刻な問題であった。水不足になりやすい谷あいでは、多くの労力をかけてたくさんのため池をつくり、雨水や融雪水を貯えて、かんがいに使つていた。夏季の渴水時には地下水に頼るなどして用水補給を行つていが、干ばつ被害を防止するまでには至つてはなかつたため、夏季の渴水時の用水補給と取水施設の維持管理の節減が、上流域の農民にとって最大の願いであつた。

ため池の多くは、新田開発が進んだ藩政時代につくられたが、小矢部川上流域で、明治以降に造られたため池として、吉見ため池がある。用水不足に対処するために、小矢部川筋用水関係者と山田新田用水組合が、共同で小矢部川支流の蛇谷川上流に貯水池を新設する事業を県に申請し、昭和5年（1930）に県営小矢部川沿岸用水補給事業として着工した。事業は、堤高31.6メートル、堤長96.3メートルの吉見ため池を築造し、90万立方メートルを貯水する計画であった。だが、ため池周辺の地質の悪さから貯水池の安全性が問題となつて貯水量は当初計画の3分の1にとどまつた。

第2次大戦による労働力不足、資材

耕地整理の先進地

小さく不規則な形の耕地を大きく平均化して、農作業の効率を図る耕地整理（ほ場整備）は、明治後期になつて行われるようになつた。

明治32年（1899）、耕地整理法



吉見ため池の造成地（『県営土地改良事業着工30周年記念事業誌』より）

桜ヶ池の造成

昭和初頭、梅原小杉耕地整理組合は、山田川に堰堤を築きダム湖を造る計画を立てた。だが、調査の結果、この計画は当時の技術では不可能であること

が判明、協議検討を重ねた結果、井口



瞞着川（南砺市福光）（南砺市立図書館蔵）

コラム 瞞着川と河童伝説

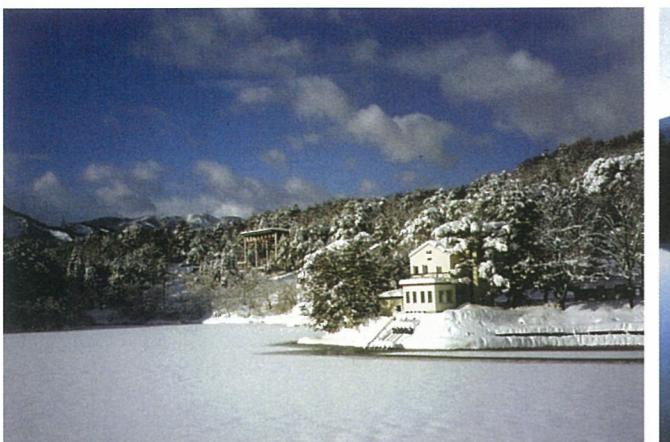
通称瞞着川として知られる豆黒川は、南砺市福光の光徳寺近くの田園を流れる小川である。かつては、春にナマズやフナが泳ぎ、夏には合歎が咲きホタルが群れるよう、どこの村にもあった川だった。その小川に惹かれて名画を残したのが、世界的板画家の棟方志功であった。棟方志功は、昭和20年（1945）に旧福光町に疎開し、光徳寺やその檀家に滞在した。棟方が好んで散歩に訪れたのが、豆黒川である。豆黒川には加賀の殿様が河童に騙されて一晩中歩き通したという逸話が伝えられている。昭和23年（1948）、棟方志功は、この川を「河童がだます川」という意味で「瞞着川」と命名し、『瞞着川板画卷』という版画集を制作した。現在、志功が愛した散歩道には、13枚の河童の板画のモニュメントが置かれ、今ものどかな光景を見せていている。



吉見ため池の堤体盛土の様子（同上）



赤祖父ため池



雪景色の桜ヶ池



桜が満開の桜ヶ池



桜ヶ池クアガーデンより小矢部川流域を望む



週末には釣りファンでにぎわう桜ヶ池

コラム

全国には約21万のため池がある。地域の生活や文化に深くかかわり、周辺の自然と一体になった生態系を保ち、また人々の憩いの場としても保全されてきた。一方、農業者の減少や高齢化に伴って従来のような維持管理が難しくなり、防災面での対応も懸念されるようになってきていることから、農林水産省は、ため池の役割と保全の必要性を地域住民のみならず国民に理解してもらうために、平成22年（2010）3月、「ため池百選」を選定し、公表した。富山県では、県内約2500のため池のうち、「桜ヶ池」と、昭和7年の用水補給事業で着工され昭和19年に完成した「赤祖父ため池」の2カ所が「ため池百選」に選定された。赤祖父ため池は、ヘラブナ釣りで有名である。

昭和16年（1941）7月、総貯水量145万2000立方メートルの貯水池1カ所と付帯施設を建設する県営山田川沿岸用水補給事業が着工した。当初はすべて人力による施工であり、戦時体制の中で着工されたため、極端な労働者不足などから事業は遅れに遅れた。第2次大戦後沈滞した状況を打破するために、当時としては画期的な機械による施工法が検討されるとになった。昭和24年下半期からは、ブルドーザーならびにキャリーオールスクレーパーによる運土とタンピングローラー、マカダムローラーなどの転圧機械との組み合わせによる施工が全国に先駆けて実施された。工事は急ピッチで進み、昭和27年3月、築堤が終了した。堰堤、斜槽通水管の工事、および幹線水路工事も含めて、昭和29年3月、すべての工事を終え、現在の設立が認可され、発足した。

らは、立野ヶ原演習場内（日本陸軍第9師団野砲演習場）にため池を造ることを考えた。昭和11年（1936）、「山田川沿岸水利補給期成同盟会」が組織され、顧問の井口仁志、旧北山村村長の古嶋理作を中心に、陸軍や県に陳情を繰り返した。県の内務部長、耕地課長らも国への出張陳情に努め、昭和15年8月、演習場の中にため池を造る計画が認可された。同年11月には、旧南山田村も事業に加盟し、井口仁志を組



立野ヶ原の旧陸軍演習場の監的壕



井口仁志胸像



機械による施工法を導入（キャノーラルスクレーパー）（『富山のかんがい排水』より）



ヶ池斜樁工事(建設当)『桜ヶ池 桜ヶ池竣工50周年記念誌』

桜ヶ池が完成した。貯水量145万ト
ン、最大水深約24メートル、かんがい
面積は旧城端町南山田、旧福光町北
山田、旧福野町の一部を範囲とする
832ヘクタールの県内最大のため池
である。桜ヶ池の築造により、山田川
沿岸の水不足は大幅に解消された。

区」に組織変更され、併せて桜1000本、つついで400本が湖畔に植樹された。昭和33年、公募によつて「桜ヶ池」と名付けられ、現在、散居村の風景や富山湾まで一望できる觀光の名所となつてゐる。昭和61年2月、「とやまの名水」に、また平成22年（2010）3月には、農林水産省の「こうじ田選」に選ばれてゐる。



桜ヶ池平面図（『水環境整備事業桜ヶ池委員会報告書』より作図）

刀利ダム建設と用水整備

繰り返される氾濫による被害

干ばつが起る一方、小矢部川上流部は地形が急峻で、林相が悪く、豪雨に見舞われれば、一気に氾濫し、農地や脆弱な取水設備などに甚大な被害を与えていた。

大正元年（1912）に庄川と分離出水、堤防決壊31カ所、橋梁流失8カ所、浸水家屋100戸余りの大災害となつたため、翌9年には、支流の千保川、山田川、渋江川、子撫川を含めて、国による小矢部川の改修工事が始められた。

しかし、その後も戦争により山林の伐採が行われたために山が荒廃し、沿岸部では大雨のたびに水害に見舞われた。昭和27年7月、28年8月、さらに同年9月と立て続けに豪雨が襲い、小矢部川沿岸一帯に大被害を発生させた。特に、28年9月には豪雨を伴う台風13号により小矢部川の水位が上昇、改修計画を上回る大洪水となつた。堤防が各地で決壊し、死者6名を出したほか、流失家屋12戸、床上浸水281

戸、床下浸水342戸、橋梁流失12カ所、田畠の流失も13367ヘクタールに及んだ。

相次ぐ3度の洪水は、計画の再検討を迫ることになり、災害復旧工事にとどまらず、根本的な大改修および治水工事が必要であることは明らかであった。農業用水を確保するとともに、洪水被害を軽減するためには、上流部にダムを建設して流量を調節することが最も有効であった。

富山県総合開発計画

昭和25年、国において、「国土総合開発法」が制定され、翌年11月には、特定地域として「飛越総合開発計画」が打ち出された。また、朝鮮戦争の特需で企業の電力需要が高まり、昭和26年に、電力再編成により北陸電力が発足した。

これらを背景として、富山県においても昭和25年より富山県総合開発計画の立案を開始、27年より調査を開始し、「飛越総合開発計画」と表裏一体をなす「南砺総合開発計画」が立案された。その後、昭和28年の大水害を受けて、農林省は、昭和29年4月から調査費を計上し、広範な調査を実施した。

昭和30年（1955）には、用水補給、洪水調節、発電などを目的とした小矢部川総合開発事業を計画（旧福光町（昭和27年1町10村が合併して誕生）を中心とする旧城端町、旧福野町、小矢部市の1市3町について水資源の総合的な開発を行い、それまで未開発だった小矢部川の水資源の有効な利用を図ることとした。こうして最終的に県は「小矢部川上流総合開発計画」を決定したのである。



コラム ダムに消えた村

さらに昭和34年12月、農水省（現・農林水産省）の「国営小矢部川農業水利事業計画」が決定した。この計画は、①刀利ダムの築造②第一・第二頭首工を建設し、既存取水施設2カ所を9カ所に統廃合③太美ダム（発電共同施設）の設置と幹線用水路の整備などを骨子として、小矢部川上流地域の農業経営の安定向上を図ることを目的とした。受益農地面積は1市3町にまたがる3780ヘクタール、総事業費は54億円余り、その内ダム工事は39億円余りであった。農業用水は、小矢部川第二発電所の放水を受けることとし、第一・第二頭首工は国営事業で、第三頭首工は県営事業において新設する計画であった。

刀利ダムの建設

昭和31年（1956）3月、総合開発計画の推進を求めるために、衆議院議員松村謙三を会長として、「小矢部川水系総合開発促進期成同盟会」が結成された。

ダム建設場所は、小矢部川上流の刀利付近、通称「ノゾキ」と呼ばれる地点であった。刀利集落は小矢部川に沿つて一列に並び、中心部が膨らんだ瓢箪上の地形で、「ノゾキ」は、強固な岩盤でできていた。また、東西からは山が迫つており、水を塞ぎとめるには恰好の地であった。この総合計画の最大の難関は、ダムによって水没する福光刀利集落27戸69人の移転補償で

あった。

ダムサイトの地質調査が本格化すると、地元住民によるダム建設反対運動が起こった。住民たちは「ダム建設反対期成同盟会」を結成、刀利ダム絶対反対運動のぼりを立てた。担当部局は数回にわたって補償交渉を行つたが、反対住民たちは、33年に「刀利ダム対策協議会」を設立、調査拒否と個別交渉を排除するに至つた。しかし、その後県知事の視察、松村謙三の度重なる説得などもあり、誠意ある対応と正当な補償を条件に交渉が再開された。

昭和36年1月31日に第1回の公式補償交渉が行われ、2か月後の3月31日、「刀利ダム対策協議会」委員長が補償協定書に押印し、交渉が成立した。昭和36年4月、多目的ダムとなる刀利ダムの建設に着手し、同42年すべての工事が完了した。

刀利ダムは堤高101メートル



刀利分校の山崎兵藏校長（左端）



刀利分校での離村式

刀利ダムの建設のために、下刀利、上刀利、滝谷の3集落がダムの底に沈んだ。また、上流にあたる中河内、下小屋の住民も移住を余儀なくされた。

広大な山林を抱えた刀利の産業は植林と製炭であった。山峡の土地ではあつたが、集落の中は耕地も広く、住民は、自然の恵みにあずかつて比較的裕福な生活を営んでいた。人里離れた「秘境」「桃源郷」、そんな言葉がふさわしい村でもあつた。全集落が浄土真宗の教えを受け継ぐ刀利には「土徳の精神」といわれるものがあつたという。刀利の住民は、何百年にもわたつて洪水や干ばつの被害に苦しむ下流域の人々のためにとの思いでダム建設による移住を決断したのである。

ダム建設の話がもちあがつて2年という年月を経て村がひとつにまとまり、昭和36年（1961）9月20日に離村式が行われた。離村式で、刀利分校の山崎兵藏校長のあいさつで「村人とともに親子のよう」に

あるいは兄弟のようにして住み着いたこの地、飲み慣れた谷内ヶ谷の水は「八功德水」の水。刀利は極楽であった。」の言葉に、参列者全員が涙したという。青く、穏やかに水を湛える刀利ダム。その50メートル下の湖底には、住居跡や学校跡、棚田などが今も静かに眠つてゐる。

平成23年（2011）6月、住民離村50周年式典が行われた。この式典は、刀利を生涯の地として明治34年から太美山小学校刀利分校に奉職し、刀利住民を物心共に支えてきた山崎兵藏の五十回忌法要と合わせて執り行われた。式典に合わせて、元住民でつくる刀利会と太美山自治振興会によつてメッセージ委員会が設立され、当時の思い出を語つたビデオメッセージを紹介するホームページも開設された。

（注）八功德水 仏の淨土もあるといわれる水。八種のすぐれた功德をそなえているとされる。

農業の近代化とほ場整備

農地改革と土地改良

戦後は食糧増産が促進され、耕地整理が進んだ。GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）は、経済民主化をめぐる諸施策を進め、敗戦の年の昭和20年（1945）12月には、第一次農地改革がスタートした。この改革の担当者は、旧福光町出身の農林大臣松村謙三であった。翌年、第二次農地改革が進展し、農地の大半が地主の手から耕作者の手に渡った。農地改革は、戦後農業の発展基盤を築くことになったが、富山県の場合、農地改革によって地主制度が解体し、農村に新しい秩序が誕生した。改革前は、全国の中でも小作率が高く、全農地の半数以上を占めていたが、改革後は自作地が94%、小作地6%に変化し、全国平均をはるかに上回った。

農地改革後の社会情勢に対応した新しい土地改良事業体制を整えるための法律として、昭和24年（1949）に土地改良法が制定され、新たな展開へと進んだ。戦後の食糧危機による食糧増産政策の主要な政策手段として土地改良事業が推進されることとなつた。零細かつ均質な自作農のもとで農業生産力を高めていくにはこの事業の推進が進展した。その具体的な施策として、38年には、ほ場整備事業が創設され、大型機械の導入を前提とした30アール区画の効率的で合理的な整備が進められた。富山県においては、既に昭和37年から第一次農業構造改善事業の一環として、30～40アール区画のほ場の大区画化が始まっており、旧福光町石黒地区など県下で計66地区が整備された。当時としては画期的であったブルドーザーで基盤を整備する方法は、36年に旧福野町野尻地区や、稻塚権次郎を委員長とする旧城端町西明地区でモデル事業として実施され、その後各地で行われるほ場整備の先駆けとなつた。

昭和42年には刀利ダムが完成し農業用水が確保されたことから周辺地域では、飛躍的にほ場整備が進んだ。昭和44年、第一次農業構造改善事業が開始され、45年からは、米の生産調整がスタートした。水稻作・畑作いずれにも利用できるように水田条件を整備する「水田の汎用化」が基盤整備の中心として位置付けられた。昭和45年以来、旧福光町・旧城端町山田新田地区（285.9ヘクタール）、小矢部市蟹谷地区（467ヘクタール）など大規模なほ場整備地区が相次いで実施された。南蟹谷地区では、白中ダムの建設と並行して、農用地開発事業が実施された。50年代まではほとんどの地域ではほ場整備が行われ、農作業の省力化と経営の安定化が

がもともと効果的であった。昭和39年には土地改良法が改正され、その後の土改事業の基礎が確立された。農民の生産の意欲は高まり、それとともに農用地開発が進められた。小矢部川流域では、陸軍の演習場であった旧福光町立野ヶ原が代表的である。

立野ヶ原と農用地開発事業

立野ヶ原は、旧福光町・旧城端町の南部に開ける広大な台地である。旧石器時代より長い歴史をもつが、明治31年（1898）から終戦まで46年間、旧陸軍の演習場として使用されてきた。昭和20年（1945）の終戦により、農用地の開発利用のために返還され、復員軍人や海外からの引き揚げ者、戦災者、農家の二・三男など、約210世帯に及ぶ開拓団が入植し、食糧の増産を図ることになった。この開墾を支援するために、是ヶ谷ため池が造成されている。

昭和30年、この地域を含めた「小矢部川上流総合開発計画」が立てられ、昭和42年に刀利ダムが完成、それにより刀利ダムから用水を確保する目途が立つた。立野ヶ原では、開拓地を抜本的に整備する機運が増大し、昭和43年に開田を中心とした「立野ヶ原開拓基

本計画」が策定された。この基本計画は、翌44年に承認された

が、その後、米の生産過剰が社会問題となり、当初の315ヘクタールの開田計

画は、3分の1の105ヘクタールに縮小された。このよ

うな糸余曲折を経たものの、昭和45年10月、県営農地開発事

業立野原地区として着工され、53年に農地整備工事が完了し

た。用水については、小矢部川第一発電所より分水する立野原用水路を整備し、必要な用水量が確保された。

その後、パイプライン用水路、排水路と道路網の整備を進め、昭和59年ま

で、既耕地と合わせて立野ヶ原全域に耕作地が拡大した。

昭和36年、近代農業の方向を示した農業基本法が制定され、農業の近代化

に大きく貢献した。

また、早期にほ場整備を実施し、事業実施後30年以上を経過した地域では、小区画（10アール）で農道も狭かつたことから、大型機械の導入に対応するため、再区画整理の必要に迫られた。平成5年には、担い手育成を重視したほ場整備事業が創設され、旧福光町北山田南部地区が平成9年から、旧福光町北山田北部地区と旧福光町吉江南部地区が10年から、大規模経営体の生産基盤となる大区画のほ場に向けて実施され、10アールの小区画から1ヘクタール規模への大区画化がなされた。

が進展した。その具体的な施策として、38年には、ほ場整備事業が創設され、大型機械の導入を前提とした30アール区画の効率的で合理的な整備が進められた。富山県においては、既に昭和37年から第一次農業構造改善事業の一環として、30～40アール区画のほ場の大区画化が始まっており、旧福光町石黒地区など県下で計66地区が整備された。当時としては画期的であったブルドーザーで基盤を整備する方法は、36年に旧福野町野尻地区や、稻塚権次郎を委員長とする旧城端町西明地区でモデル事業として実施され、その後各地で行われるほ場整備の先駆けとなつた。

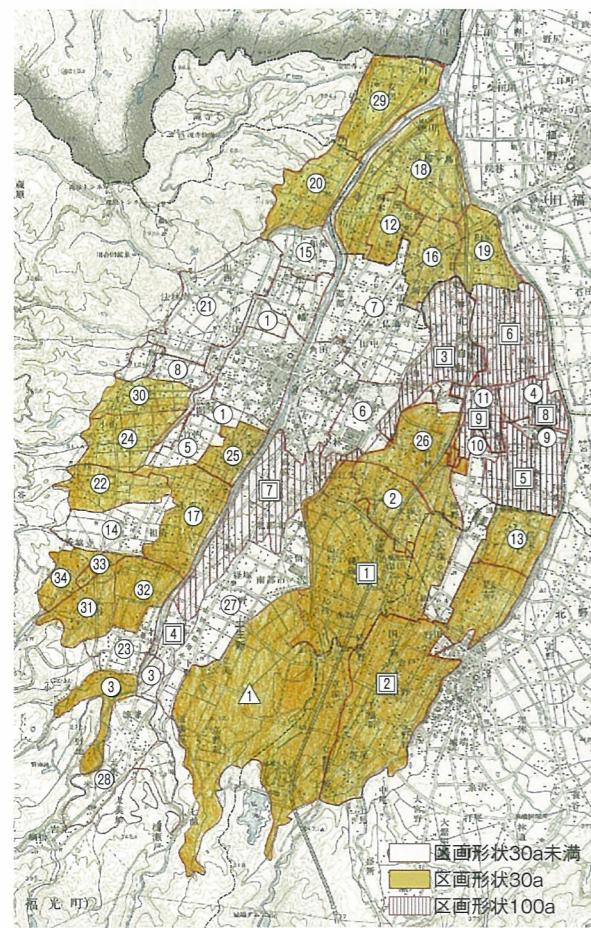
昭和42年には刀利ダムが完成し農業用水が確保されたことから周辺地域では、飛躍的にほ場整備が進んだ。昭和44年、第一次農業構造改善事業が開始され、45年からは、米の生産調整がスタートした。水稻作・畑作いずれにも利用できるように水田条件を整備する「水田の汎用化」が基盤整備の中心として位置付けられた。昭和45年以来、旧福光町・旧城端町山田新田地区（285.9ヘクタール）、小矢部市蟹谷地区（467ヘクタール）など大規模なほ場整備地区が相次いで実施された。南蟹谷地区では、白中ダムの建設と並行して、農用地開発事業が実施された。50年代まではほとんどの地域ではほ場整備が行われ、農作業の省力化と経営の安定化が

平成のほ場整備事業

平成に入ると、水稻作をめぐる環境は一層厳しくなり、生産コストを下げることを目的として、當農組合の組織化や中核農家を育成するためのほ場整備が進展した。

最新の技術により、平成2年（1990）からは、県営ほ場整備事業が1ヘクタール区画で行われるようになり、同年に旧福光町梅原地区（93ヘクタール）、平成4年には、旧福光町土生地区（29ヘクタール）が、「低コスト化水田農業大区画ほ場整備事業」として採択され、13年に完了した。これらの地区では、地域の合意形成のもと、當農組合による大規模な経営が実施され、機械作業の効率化による労働時間の短縮、農地の利用集積の進展に大きく貢献した。

また、早期にほ場整備を実施し、事業実施後30年以上を経過した地域では、小区画（10アール）で農道も狭かつたことから、大型機械の導入に対応するため、再区画整理の必要に迫られた。平成5年には、担い手育成を重視したほ場整備事業が創設され、旧福光町北山田南部地区が平成9年から、旧福光町北山田北部地区と旧福光町吉江南部地区が10年から、大規模経営体の生産基盤となる大区画のほ場に向けて実施され、10アールの小区画から1ヘクタール規模への大区画化がなされた。



小矢部川上流域におけるほ場整備状況

番号	地区名	年度	面積(ha)	旧市町村	区画形状(a)
1	山田端	S45-S53	285.9	福光・城端	30
2	梅土生	S46-S53	285.6	福光	100
3	北山田南部	H2-H12	93.1	福光	100
4	北山田北部	H4-H10	28.9	福光	100
5	吉江南部	H9-H19	95.6	福光	100
6	北山田中部東	H10-H20	102.2	福光	100
7	北山田中部西	H10-H20	123.0	福光	100
8	北山田中部東	H20-H25予	50.0	南砺	100
9	北山田中部西	H21-H26予	32.3	南砺	100

農用地開発事業

△ 立野ヶ原 S44-S56 442.5 城端、福光 30 ほ場整備が行われた北山田北部地区



ほ場整備が行われた北山田北部地区

ほ場整備事業の拡大

昭和36年、近代農業の方向を示した農業基本法が制定され、農業の近代化



戦後の立野ヶ原開墾の様子（富山県公文書館蔵）



農用地開発が進んだ立野ヶ原

白中ダムと用水路の整備

営農形態の変化への対応

小矢部川上流域のかんがい用水は、昭和42年（1967）に完成した刀利ダムの建設を軸とした県営事業によつて、幹線用水路の改良や大井川・明神川の改修が行われ、用水路が整備されたことにより水不足は解消されるものと思われた。

しかし、昭和40年代に入ると、高度経済成長により農業を取り巻く環境は急速に変化し、農業用水の利用にも影響を与えることになった。大区画のほ

場整備と大型機械の導入が進んだことで効率的な農作業が可能となつたことや、昭和45年より始まつた生産調整と転作の推進に伴つて、水田の汎用化が積極的に進められたことなどから使用水量が増加して用水不足を助長し、この地域は再び慢性的な水不足の状態となつた。

また、上流部において小矢部川に流入する打尾川は、流域面積が25平方キロメートル余りの中小河川であるが、急流の上に河川断面が小さく、しばしば洪水を発生させ、下流の農地、農作物に甚大な被害を及ぼしていた。こう

日の前日に20世帯76人の閉村式が行われ、全世帯が移転した。

ダム本体の建設工事は昭和58年に着手され、8年の歳月と総事業費189億円余りをかけて平成5年に完工した。県営土地改良事業で造成したロックフィルダムの中では全国一の堤高を誇っている。

また、昭和58年、農業用排水路整備にあたつて、水力発電施設の造成・整備計画を追加し、白中ダムの放流水を利用する白中発電所が建設された。土地改良施設の操作に必要な電力供給により維持管理費の低減を図るダム従属式の自家用発電所である。平成9年、白中発電所の建設に着手、平成10年12月に運用を開始した。白中ダムの放流水を水圧管路で発電所に導水し、最大出力910キロワットの発電を行つてゐる。

用水路の整備

県営かんがい排水事業、防災ダム事業打尾川地区に併せて、昭和60年（1985）より、西部山麓、大鋸屋、立野原、四ヶ村用水路の4路線の整備が行われ、総延長21.1キロメートルのかんがい用水路が平成7年（1995）に完成した。

西部山麓用水路

南蟹谷地域は、石川県に接する旧福光町西部の農山村地帯である。農地が散在し、地形勾配が急で水源も少なく、用排水路や農道も未整備であった。特

した状況の中で、流域の農家の間では、新たなダムを建設して農業用水の安定化を図つてほしいという要望が高まつた。昭和48年、1市3町（小矢部市・旧福光町・旧福野町・旧城端町）の土

地改良区を中心として、打尾川地区農業水利事業期成同盟会を結成し、ダムの建設に向けて動き出した。これを受けて、翌49年、富山県は、農林省に対して、農業用水の補給を目的としたかんがい排水事業と打尾川沿いの防災を目的とする防災ダム事業を申請、刀利ダムを補完する新たなダム事業に取り組んだ。

白中ダムの建設

昭和50年（1975）、打尾川地区的県営かんがい排水事業、防災ダム事業が採択され、2年間の調査を経て、昭和52年4月に着工された。先の国営小矢部川農業水利事業の区域のほか、當農形態の変化による用水不足に悩んでいた旧福光町・南蟹谷地区と旧城端町大鋸屋地区を含む4354ヘクタールを対象とした。

主要施設として、堤高68.9メートル、堤長238メートル、総貯水量695万立方メートルのロックフィルダムである白中ダムが打尾川の中流域

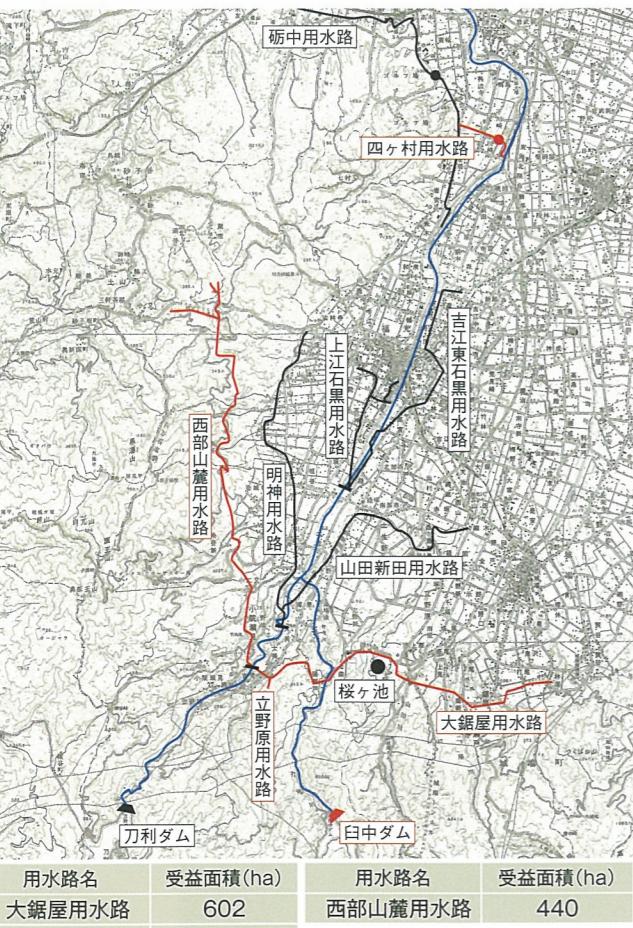


白中ダム

建設中の白中ダム



白中集落開村式



現在の大鋸屋用水路



現在の西部山麓用水路



現在の四ヶ村用水路

砾中用水路にポンプで揚水し補給する取水施設が老朽化等により取水不可能となつたため、砾中用水路下流部では用水不足が生じたことから、旧四ヶ村取水口を改良し、砾中用水路に補給するパイプラインによる四ヶ村用水路が新設された。工事は昭和55年に着手し、平成4年に完工した。

地域の暮らしを支える農業用水

農業用水の多面的機能

小矢部川上流域は、古くから豊かな穀倉地帯であり、砺波平野の散居村景観は、日本の稻作農村を代表する美しい景観のひとつと言われている。

また、網の目のように縦横に張り巡らされた農業用水路は、農業生産のほか、火災の消火や消流雪に利用されるなど、地域用水としての機能を発揮しており、さまざまな面から私たちの生活を支えている。また、農地や土地改良施設も、水害の防止や地域の自然環境の維持、水源の涵養などの多面的機能を有するなど、私たちの安全で安心な日々の暮らしを支えている。

近年は、クリーンエネルギーとして、農業用水を利用した小水力発電が注目を集めようになつた。平成23年（2011）10月5日、県が建設する小水力発電所である「山田新田用水発電所（仮称）」の起工式が行われた。この発電所では、非かんがい期の農業用水路の空き容量を利用して発電用水を流し発電するという県内でも初めての試みを行つていて。平成25年3月に運転を開始する予定で、一般家庭612世帯分に相当する年間257万キロ・ワット時の発

電が可能となる。完成後は小矢部川上流水土地改良区が管理運営し、建設の維持管理費に充てることになる。

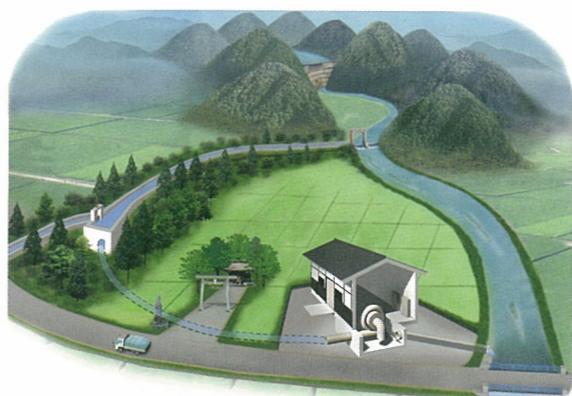
農業・農村の基盤となる農業用水の保全を図り、農業が有する自然循環機能を維持・増進するため、農村住民は昔から共同活動などにより、農業用水路等の保全管理活動や老朽化が進んだ水路等の補修などを行つてきた。春江ざらいに始まり、夏はため池や水

路等の保全管理活動や老朽化が進んだ水路等の補修などを行つてきた。春江ざらいに始まり、夏はため池や水路等の保全管理活動や老朽化が進んだ水路等の補修などを行つてきた。春江ざらいに始まり、夏はため池や水

路の草刈り、清掃など、1年を通して上流水土地改良区が管理運営し、維持管理を行つていている。また、安全対策と不法投棄防止のために、用水路の主だつた場所に簡易安全柵や看板を設置するなどの活動も欠かせない。

しかし、農村の混住化の進展や担い手の高齢化などに伴い、農家による維持管理が困難となりつつある。そこで、地域住民と連携した適正な維持管理体制づくりや、土地改良施設の役割をPRするパンフレットの配布など啓発活動の推進が重要となつてきている。なかでも、水土里探訪ウォークは、ウォーキングを通じて、農業水利施設がもつてゐる歴史的な背景や役割、消流雪機能や生態系保全機能などの多面的機能についての理解を深めてもらうために県内各所で開催しており、小矢部川上流域では、南砺市井口にある赤祖父ため池周辺、桜ヶ池周辺を歩くコースなどが人気を集めている。

平成21年（2009）には、南砺市の主催による「桜ヶ池語り部」養成講座が開催された。桜ヶ池周辺のみならず、立野ヶ原の自然、そこに生息する小動物の生態、自然の恵みから受け取れる地元の農産物について学ぶことを目的としたものである。



山田新田用水発電所（仮称）鳥瞰図

水辺環境保全への取り組み

私たちの生活にうるおいやすらぎを与えてくれる農村の豊かな自然や美しい景観や地域用水としての農業用水は、貴重な地域資源であり、この資源を維持保全し、次世代に引き継ぐことは私たちに課された使命である。旧福光町高宮地内では、農業用排水路の整備にあたつて、ゲンジボタルやカワニナ、ドジョウなどの水生生物が生息していることから、これらの水生生物が引き続き生息できることによつて多様な流れを確保する工夫を行つた。現在使つた石積み護岸を整備し、水路の底には砂利を敷き詰めた。それとともに、水路幅を変化させることによつて多様な流れを確保する工夫を行つた。現在は、カワニナの生息が確認され、ホタルの飛来も見受けられている。

また、子どもたちに、水辺の環境保護の大切さを知つてもらうための活動もますます重要になつていて、小矢部川上流域では、「田んぼの生き物調べ」など、さまざまな自然活動に取り組んできている。

平成12年（2000）からは、城端地域の有志、農業者、ナチュラリスト、ボイスカウトのリーダーやサラリーマンなどが集まり、桜ヶ池自然体験教室を始めた。南砺市内の小学3年生から6年生を対象として、年間12回の教室を開いている。さらに平成13年より、桜ヶ池上流にある水芭蕉広場のボランティア活動をはじめ、「懐かしく美しい風景命あふれる水と土私たちのふたりフレーズに、さまざまな活動に取り組んでいる。

コラム 小矢部川上流域の行事

福光ねつおり
南砺地方では、一年で一番暑いとされる土用の三番の日に「ねつおり」と称される祭りが続けられる。大人は太鼓を打ち鳴らし、子どもたちがそれに合わせて、「ネツオクルバイ、オクルバイ、オクルバイ」と唄い離しながら、五色の短冊で飾った笹竹で稲田を払い、「じじ、ばば」と呼ばれるわら人形を乗せた田の神舟（紙で作った張り子の舟）を担いで村々を回る。そして最後にはその舟を福吉橋から小矢部川へ投げ込んで祭りが終了する。イモチ病をはじめとする稻の病害虫を退治し、農作物の豊作を祈る行事で、人形はイモチ病を背負つて遠くへ行つてくれる身代わりの存在とされている。

江戸時代の加賀藩の時代から行われおり、古くからの形態がそのままに伝えられている貴重な民俗行事である。



ねつおり（荒木町）（南砺市立図書館蔵）



ホタルの飛来（旧福光町高宮地内）



田んぼの生き物調べ



自然体験教室（桜ヶ池）



水土里探訪ウォーク



江ざらい

小矢部川上流用水年表

和暦・西暦

月日

事項

昭和42(1967)	9·13	刀利ダム完成
昭和43(1968)	2	県営小矢部川第一・第二発電所完成
昭和44(1969)	11·22	小矢部川水系工事実施基本計画を策定
昭和45(1970)	9·21	刀利ダム完成以降、営農合理化・農作業の省力化を目的とするほ場整備が急速に進む
昭和46(1971)	8·21	県営農用地開発事業として立野ヶ原開拓基本計画策定
昭和47(1972)	9·12	農業の第二次構造改善事業はじまる
昭和48(1973)	3·19	吉東石黒用水路 上江石黒用水路完工
昭和49(1974)	3·19	米の生産調整はじまる
昭和50(1975)	11·22	米の生産過剰に伴う開田抑制通達により立野ヶ原開拓の計画変更
昭和51(1976)	9·21	(3·15 ヘクタール → 10·5 ヘクタール)
昭和52(1977)	8·21	立野ヶ原開拓計画変更を承認。10月、工事に着手
昭和53(1978)	8·21	中河内集落で解村式
昭和54(1979)	11·22	旧福光町・旧城端町にまたがる山田新田地区で 2·8·5·9 ヘクタールの県営ほ場整備事業着手(→昭和53年度完了)
昭和55(1980)	9·12	松村謙三氏逝去
昭和56(1981)	3·19	水稻の生産調整に伴う畑作物導入により、ほ場の乾田化要請高まる
昭和57(1982)	3·19	旧城端町城端西部地区、小矢部市蟹谷地区で県営ほ場整備事業着手
昭和58(1983)	3·19	山田新田用水路完工
昭和59(1984)	3·19	砺中用水路完工
昭和60(1985)	3·19	立野原用水路 明神用水路完工
昭和61(1986)	3·19	明神川排水路・大井川排水路完工
昭和62(1987)	3·19	白中ダムを基幹施設とする県営打尾川地区計画着手
昭和63(1988)	3·19	県営かんがい排水事業及び防災ダム事業開始(→平成5年)
昭和64(1989)	3·19	立野ヶ原開田整備工事完了、組合員には場配分される
昭和65(1990)	3·19	県営農用地開発事業として南蟹谷地域の基本計画策定
昭和66(1991)	3·19	南蟹谷地域開発事業工事着手
昭和67(1992)	3·19	小矢部川の長瀬が「どやまの名水」に選ばれる
昭和68(1993)	3·19	県営ほ場整備事業が1ヘクタール区画で行われるようになる
昭和69(1994)	3·19	低コスト化水田農業大区画ほ場整備事業に採択された福光町梅原地区で、ほ場整備着手(→平成12年度完了)
昭和70(1995)	3·19	城端ダム竣工
昭和71(1996)	3·19	低コスト化水田農業大区画ほ場整備事業に採択された南砺市土生地区で、ほ場整備着手(→平成10年度完了)
昭和72(1997)	3·19	この頃、100年に一度という大干ばつに見舞われる
昭和73(1998)	3·19	県営かんがい排水事業・防災ダム事業打尾川地区完成
昭和74(1999)	3·19	白中ダム完成
昭和75(2000)	3·19	この頃、100年に一度といふほ場整備着手(→平成10年度完了)
昭和76(2001)	3·19	白中ダム完成
昭和77(2002)	3·19	この頃、100年に一度といふほ場整備着手(→平成10年度完了)
昭和78(2003)	3·19	この頃、100年に一度といふほ場整備着手(→平成10年度完了)
昭和79(2004)	3·19	この頃、100年に一度といふほ場整備着手(→平成10年度完了)
昭和80(2005)	3·19	この頃、100年に一度といふほ場整備着手(→平成10年度完了)
昭和81(2006)	3·19	この頃、100年に一度といふほ場整備着手(→平成10年度完了)
昭和82(2007)	3·19	この頃、100年に一度といふほ場整備着手(→平成10年度完了)
昭和83(2008)	3·19	この頃、100年に一度といふほ場整備着手(→平成10年度完了)
昭和84(2009)	3·19	この頃、100年に一度といふほ場整備着手(→平成10年度完了)
昭和85(2010)	3·19	この頃、100年に一度といふほ場整備着手(→平成10年度完了)
昭和86(2011)	3·19	この頃、100年に一度といふほ場整備着手(→平成10年度完了)
昭和87(2012)	3·19	この頃、100年に一度といふほ場整備着手(→平成10年度完了)
昭和88(2013)	3·19	この頃、100年に一度といふほ場整備着手(→平成10年度完了)
昭和89(2014)	3·19	この頃、100年に一度といふほ場整備着手(→平成10年度完了)
昭和90(2015)	3·19	この頃、100年に一度といふほ場整備着手(→平成10年度完了)
昭和91(2016)	3·19	この頃、100年に一度といふほ場整備着手(→平成10年度完了)
昭和92(2017)	3·19	この頃、100年に一度といふほ場整備着手(→平成10年度完了)
昭和93(2018)	3·19	この頃、100年に一度といふほ場整備着手(→平成10年度完了)
昭和94(2019)	3·19	この頃、100年に一度といふほ場整備着手(→平成10年度完了)
昭和95(2020)	3·19	この頃、100年に一度といふほ場整備着手(→平成10年度完了)
昭和96(2021)	3·19	この頃、100年に一度といふほ場整備着手(→平成10年度完了)
昭和97(2022)	3·19	この頃、100年に一度といふほ場整備着手(→平成10年度完了)
昭和98(2023)	3·19	この頃、100年に一度といふほ場整備着手(→平成10年度完了)
昭和99(2024)	3·19	この頃、100年に一度といふほ場整備着手(→平成10年度完了)
昭和100(2025)	3·19	この頃、100年に一度といふほ場整備着手(→平成10年度完了)

昭和12(1937)	10·31	大伴家持、越中国司となり、射水川(小矢部川)を題材にすぐれた歌を残す
昭和13(1938)	10·31	前田利長、越中砺波・婦負・射水の3群郡を受く
昭和14(1939)	10·31	越中国東大寺莊園開田地図が作られる
昭和15(1940)	10·31	天正宝字3(759)
昭和16(1941)	10·31	天正13(1585)
昭和17(1942)	10·31	寛文19(1642)
昭和18(1943)	10·31	天正13(1585)
昭和19(1944)	10·31	寛文13(延宝元)(673)
昭和20(1945)	10·31	天明3(1783)
昭和21(1946)	10·31	明治5(1872)
昭和22(1947)	10·31	明治8(1875)
昭和23(1948)	10·31	明治16(1880)
昭和24(1949)	10·31	明治16(1883)
昭和25(1950)	10·31	明治29(1890)
昭和26(1951)	10·31	明治22(1889)
昭和27(1952)	10·31	明治31(1898)
昭和28(1953)	10·31	明治32(1899)
昭和29(1954)	10·31	明治33(1900)
昭和30(1955)	10·31	明治34(1901)
昭和31(1956)	10·31	明治35(1902)
昭和32(1957)	10·31	大正1(1912)
昭和33(1958)	10·31	大正12(1923)
昭和34(1959)	10·31	大正15(1926)
昭和35(1960)	10·31	大正1(1912)
昭和36(1961)	10·31	昭和5(1930)
昭和37(1962)	10·31	昭和11(1936)
昭和38(1963)	10·31	昭和11(1936)
昭和39(1964)	10·31	昭和11(1936)
昭和40(1965)	10·31	昭和11(1936)
昭和41(1966)	10·31	昭和11(1936)
昭和42(1967)	10·31	昭和11(1936)
昭和43(1968)	10·31	昭和11(1936)
昭和44(1969)	10·31	昭和11(1936)
昭和45(1970)	10·31	昭和11(1936)
昭和46(1971)	10·31	昭和11(1936)
昭和47(1972)	10·31	昭和11(1936)
昭和48(1973)	10·31	昭和11(1936)
昭和49(1974)	10·31	昭和11(1936)
昭和50(1975)	10·31	昭和11(1936)
昭和51(1976)	10·31	昭和11(1936)
昭和52(1977)	10·31	昭和11(1936)
昭和53(1978)	10·31	昭和11(1936)
昭和54(1979)	10·31	昭和11(1936)
昭和55(1980)	10·31	昭和11(1936)
昭和56(1981)	10·31	昭和11(1936)
昭和57(1982)	10·31	昭和11(1936)
昭和58(1983)	10·31	昭和11(1936)
昭和59(1984)	10·31	昭和11(1936)
昭和60(1985)	10·31	昭和11(1936)
昭和61(1986)	10·31	昭和11(1936)
昭和62(1987)	10·31	昭和11(1936)
昭和63(1988)	10·31	昭和11(1936)
昭和64(1989)	10·31	昭和11(1936)
昭和65(1990)	10·31	昭和11(1936)
昭和66(1991)	10·31	昭和11(1936)
昭和67(1992)	10·31	昭和11(1936)
昭和68(1993)	10·31	昭和11(1936)
昭和69(1994)	10·31	昭和11(1936)
昭和70(1995)	10·31	昭和11(1936)
昭和71(1996)	10·31	昭和11(1936)
昭和72(1997)	10·31	昭和11(1936)
昭和73(1998)	10·31	昭和11(1936)
昭和74(1999)	10·31	昭和11(1936)
昭和75(2000)	10·31	昭和11(1936)
昭和76(2001)	10·31	昭和11(1936)
昭和77(2002)	10·31	昭和11(1936)
昭和78(2003)	10·31	昭和11(1936)
昭和79(2004)	10·31	昭和11(1936)
昭和80(2005)	10·31	昭和11(1936)
昭和81(2006)	10·31	昭和11(1936)
昭和82(2007)	10·31	昭和11(1936)
昭和83(2008)	10·31	昭和11(1936)
昭和84(2009)	10·31	昭和11(1936)
昭和85(2010)	10·31	昭和11(1936)
昭和86(2011)	10·31	昭和11(1936)
昭和87(2012)	10·31	昭和11(1936)
昭和88(2013)	10·31	昭和11(1936)
昭和89(2014)	10·31	昭和11(1936)
昭和90(2015)	10·31	昭和11(1936)
昭和91(2016)	10·31	昭和11(1936)
昭和92(2017)	10·31	昭和11(1936)
昭和93(2018)	10·31	昭和11(1936)
昭和94(2019)	10·31	昭和11(1936)
昭和95(2020)	10·31	昭和11(1936)
昭和96(2021)	10·31	昭和11(1936)
昭和97(2022)	10·31	昭和11(1936)
昭和98(2023)	10·31	昭和11(1936)
昭和99(2024)	10·31	昭和11(1936)
昭和100(2025)	10·31	昭和11(1936)

昭和12(1937)	10·31	大伴家持、越中国司となり、射水川(小矢部川)を題材にすぐれた歌を残す

<tbl_r cells="3



水没前の刀利集落(上)と刀利離村式(右)



桜ヶ池



臼中ダム(上)と臼中集落閉村式(右)



刀利・臼中の慈しみをつなぐ 小矢部川上流用水
平成24年3月 発行

発 行 小矢部川上流用水歴史冊子編さん委員会

(富山県農林水産部農村整備課/富山県砺波農林振興センター/小矢部川ダム管理事務所
水土里ネット富山(富山県土地改良事業団体連合会)/小矢部川上流用水土地改良区
福光町土地改良区/城端土地改良区/福野町土地改良区/小矢部市土地改良区)

事 務 局 富山県砺波農林振興センター 〒939-1386 富山県砺波市幸町1-7
TEL0763-32-8197 FAX0763-32-8140

編集協力 青青編集

印 刷 富山スガキ株式会社